

サイエントロジー 新しい宗教

M. ダロル・ブライアント博士
宗教・文化学教授
ウォータールー大学レニソン校
カナダ、オンタリオ州ウォータールー

1994年9月26日

サイエントロジー
新しい宗教



サイエントロジー
新しい宗教

目次

I. 専門経歴	1
II. 課題	3
III. 「新しい宗教」と宗教の研究	4
IV. サイエントロジーは宗教なのか?	6
V. サイエントロジーは礼拝団体なのか?	12

1994年9月26日

サイエントロジー 新しい宗教

M. ダロル・ブライアント博士
宗教・文化学教授

ウォータールー大学レニソン校
カナダ、オンタリオ州ウォータールー

I. 専門経歴

合衆国ミネソタ州ムーアヘッドにあるコンコーディア大学から、哲学および政治学の**優秀学士号** (1964年) を授与された。合衆国マサチューセッツ州ケンブリッジにあるハーバード大学のハーバード神学校からは**優秀神学学士号** (1967年) を授与された。特別宗教学での修士号 (1972年) および**優秀博士号** (1976年) を、カナダ、オンタリオ州にあるトロント大学聖マイケル・カレッジのキリスト教思想研究所から授与された。学位論文の題名は「ジョナサン・エドワーズの歴史と終末論：ヘイメート テーゼ批判」である。

私が教壇に立ったのは、ミネソタ州ムーアヘッドのコンコーディア大学 (1996年夏)、オンタリオ州ウォータールーのウォータールー・ルーテル大学 (1967-1969年)、オンタリオ州ウィンザーのウィンザー大学 (1972年および1973年の夏)、オンタリオ州トロントのトロント大学公開講座 (1972年)、そして1973年から現在までオンタリオ州ウォータールーのウォータールー大学レニソン校においてである。ウォータールー大学レニソン校にて宗教学および文化学の教授に任命されている。また、私は同大学の社会開発学准教授でもある。1982年以来、ウォータールー大学とゲルフ大学にある歴史再構築のコンソーシアム支援学部に参加している。そして、ウォータールー大学宗教学部の学部長

(1987-1993 年) として勤務し、現在はウォータールー大学で宗教学修士課程の生徒を担当している。

また私は、イギリス、ケンブリッジのケンブリッジ大学 (1980 年)、インド、ニューデリーのインド・イスラム学研究所、インド、マドラスのマドラス大学の S. ラークリシュナン博士高等哲学研究所 (1987 年)、インド、ニューデリーのハムダード大学 (1993 年)、そしてケニヤ、ナイロビのナイロビ大学 (1994 年) 客員教授でもあった。さらに、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカ、そしてヨーロッパの多くの大学で講義をしたことがある。

私は、以下に挙げる 4 冊の宗教学関係の著書を執筆した。「To Whom It May Concern: Poverty, Humanity, Community」(フィラデルフィア 1969 年)、「A World Broken By Unshared Bread」(ジュネーブ 1970 年)、「Religion in a New Key」(ニューデリー 1992 年)、「Jonathan Edward's Grammar of Time, Self and Society」(ニューヨーク ルウィストン 1993 年)。また、宗教学の分野でさらに 12 冊の書籍を(単独または共同で)編纂している。それらは以下に挙げるものを含む。「Exploring Unification Theology」(ニューヨーク 1978 年)、「God: The Contemporary Discussion」(ニューヨーク 1982 年)、「The Many Faces of Religion and Society」(ニューヨーク 1985 年)、「Eugen Rosenstock-Huessy: Studies in His Life and Thought」(ニューヨーク ルウィストン 1986 年)、「Interreligious Dialogue: Voices for a New Frontier」(ニューヨーク 1989 年)、および「Pluralism, Tolerance and Dialogue」(ウォータールー 1989 年)。私はドリス・ジャコブッシュとともに「A Canadian Interfaith Directory」(ウォータールー 1993 年)を編纂した。私は 40 以上の学術論文を発表しており、以下のものが含まれる。「Faith and History in Grant's Lament」、「Media Ethics, Cinema, Religion and Popular Culture」、「Sin and Society」、「The Consolations of Philosophy」、「New Religions: Issues and Questions」、「Towards a Grammar of The Spirit in Society」、「Interreligious Dialogue and Understanding」、「The Purposes of Christ: Towards the Recovery of a Trinitarian Perspective」、「From 'De' to 'Re' or Does the 'Future of the Ontotheology' Require the Recovery of the Experience/Sense of Transcendence?」、「The Kumbha Mela: A Festival of Renewal」、および「To Hear the Stars Speak: Ontology in the Study of Religion」。私の出版物は、宗教と文化の広範囲にわたっているが、以下のような分野に分けることができる。I. 神学と倫理学、II. 北アメリカの宗教、III. 新宗教の動向、そして IV. 宗教間の対話、である。

私は 25 年以上もの間、宗教学を教えている。ウォータールー大学レニソン校では、学究的な宗教学でよく使われる比較、歴史、そして社会学的な方法論を取り入れた宗教探求、宗教学、キリスト教思想、それに宗教間の抗争および対話という主題を定期的に教えている。また時には、宗教と政治、宗教と文学、宗教と映画といった科目の教壇に立ち、セクト、カルトおよび新宗教の

動きについての講義をした。さらに、大学院課程で、キリスト教および世界の宗教についての教鞭を執ったこともある。

私は長年、カナダ宗教学会、アメリカ宗教アカデミー、カナダ神学会、高等教育の価値のための学会、王立アジア学会、そして仏教キリスト教学会の組織に会員として在籍している。私は、世界宗教集会（1985年、1990年、1992年）を含む主要な国際的および宗教間の会議でコンサルタントとして働いたこともある。

宗教学と文化学の学者として、1970年以来、新宗教運動の研究に従事している。関心があるのは、これら新宗教の起源、信仰、実践、および幅広い文化に対する関わりである。（多くの新宗教は全く「新しい」という意味ではなく、ただ単に北アメリカ社会にとって新しいのである。）また、私が興味深いと感じている、そしてやや驚愕の念を感じずにいられないのは、新宗教運動に対する大衆の強烈な、またしばしばヒステリックでもある反応である。私はカナダ、アメリカ、そしてインドのいくつかの新宗教の団体とともに大規模な現地調査を行った。

サイエントロジー教会という新宗教の団体に関して、私が最初に関心を持つようになったのは1970年代半ばのことであった。以後、私はオンタリオ州トロントとキッチネールでサイエントロジー教会の会員たちと会合した。1970年代の後半と1980年代の後半に、サイエントロジー教会の会員と宗教学者が集まってサイエントロジーの基本的信仰と宗教的実践を討論する会に、何度か出席することができた。私はアメリカとイギリス支部の教会の会員たちと会合した。私は会員たちと、サイエントロジーにおける経験や人生に及ぼすその影響について、長時間会話を交わした。私は今日まで、数人のカナダの教会の会員と何度か連絡を取っている。私は、キッチネールとトロントのヨンジ通りにあるサイエントロジー教会を訪問したことがある。1970年代半ば以来、私はサイエントロジー教会の主要な出版物の多くに目を通してきた。その中には、『ダイアネティックス：心の健康のための現代科学』、『ボランティア聖職者ハンドブック』、『サイエントロジーとは何ですか？』、『サイエントロジー宗教』が含まれる。また、薬物乱用、精神衛生や精神医療の実践に関する、そして信仰の自由を含む現代の社会問題に呼び掛けている教会の出版物にも目を通した。その大部分を社会科学者が著したサイエントロジー教会についての学術論文や本も読破した。

II. 課題

宗教学者としてふたつの疑問に対し、私の意見を共有することを依頼されている。1. サイエントロジーは「宗教」なのか？という疑問、もうひとつは、サイエントロジー教会は礼拝の場所なのか？である。さらに、これらの疑問はサイエントロジー教会の組織としての非課税地位に関する疑問と密接な関係を持っている、ということが私の理解するところである。これらの疑問への取り組

みとして、私は新宗教運動の研究でのいくつかの経験を生かし、上記の疑問に直面したい。私の分析と疑問への答えは、単に一宗教学者としての私の見解であり、決して法的または行政の専門的見解ではない。

III. 「新しい宗教」と宗教の研究

今世紀後半に、北米や欧州で多数の「新宗教」の出現が見られた。一般メディアは、新宗教をしばしば「カルト」と呼び、それにはハーレ・クリシュナ、3HO、統一教会、超越瞑想 (Transcendental Meditation) やサイエントロジーなどの団体が含まれていた。「新宗教」が一般メディアの注目を浴びる中、新宗教団体のメンバーたちは彼らの選択でそこにいるのではなく、「計画された」、または「洗脳された」のだというセンセーショナルな主張が大抵存在した。そのような主張は、いくつかの政治上の調査 (ヒル・ロバート著「Mind-Development Groups, Sects and Cults in Ontario」1980年) の対象であると同時に、学問的な調査の主題 (アイリーン・バーカー著「The Making of A Moonie」オックスフォード 1984年) でもある。そうした責任のある学問上および政治上の調査は、そのような疑いに対する根拠を見つけられず、先入観だけが残っている。

宗教学者が1960年代と70年代の「新宗教団体」に目を向けた時、何の価値もない調査をいくつか行った。それらの研究は1980年代と90年代まで続き、世界の他の地域にまで拡大していった。

「新宗教」の多くは、実際に「新しい」ものではなく、ただ北米にとって「新しい」のである。例えば、ハーレ・クリシュナ運動はよく「新宗教 / カルト」と見なされるが、それは実際には北アメリカにとって「新しい」だけなのである。ハーレ・クリシュナは、インドで長年活動している団体であり、15世紀のヒンズー改革者であるカイトニヤ (Caitanya) の人生と作品に端を発するものである。インドでは、それ以来断続的に存在していたが、アメリカに上陸したのは1960年代である。同じことが東ヒンズー教 (East Hindu)、仏教、シーク教の伝統を起源とする他のいくつかの新宗教運動にも当てはまる。

さらに少数の新宗教は、旧宗教の宗派が忘れた、または怠ってきた観点の復旧、(それはしばしばイスラム教、ユダヤ教、キリスト教の信仰の神秘的なまたは瞑想的な特性) に端を発している。例えばカナダで起きた最初の「強制改宗」の事件は、オンタリオ州オレンジビルにあるカトリックのカリスマ団体に参加した若い女性や、ウォータールー大学の大学院生を巻き込んだ。

「新宗教」の多くは、アジアやアフリカの土着の伝統とキリスト教またはイスラム教の布教との衝突から出現した。これらの団体が北米で信仰を広めるようになった時、人々は恐怖感とともに静

観した。それは新しい団体の信仰の多くが、もともとの支配的信仰から「異端」視されていたからである。統一教会のようなこれらの統合的な動きのいくつかは、キリスト教伝道の世界に端を発しているが、「新しい啓示」や土着の伝統、伝統的な宗教の要素を統合している。それに類似しているケースはバハイ宗派 (The Bahai) である。それはイスラムの伝統から現れたものだが、「新しい啓示」を取り入れている。

いくつかの新宗教、例えばサイエントロジーやプロスペロス (The Prosperos) は、一般的に「新しい」(参照: ロバート・エルウッド・ジュニア著「Religious and Spiritual Groups in Modern America」ニュージャージー州イングルウッド・クリフス 1973 年)。しかし、このような場合でも、真新しさに対する否定がある。例えば、L. ロン ハバードは、サイエントロジーが「完全に釈迦牟尼の業績の延長」であると主張している(『ボランティア聖職者ハンドブック』)。よって、このような場合でさえ、より古い宗派、もしくは他の宗派に前例を持つ、または類する信仰、宗教的実践、靈感、または儀式的要素がある。

宗教歴史学者が私たちに喚起しているのは、「新宗教運動」が常に出現しているということである。例として歴史学者が指摘したのは、「新宗教運動」が国中で出現した 19 世紀のアメリカ、または似たような現象が見られた 20 世紀の、特に第二次大戦後の日本がある。19 世紀のアメリカにおけるほとんどのケースでは、さまざまなキリスト教についての解釈はあったが、「新しいもの」は何もなかった。(参照: マリー・ファレル・ベドナロスキー著「New Religions and the Theological Imagination in America」インディアナ州ブルーミントン 1989 年)。シェーカー教やクエーカー教、モルモン教徒や自由主義派、オナイダ教やニュー・ハーモニー会派、そして千ほどの他の宗教があった。日本の場合、ほとんどの新宗教運動は仏教に端を発し、一番有名なのが創価学会である。このことにより、その同じ歴史学者たちは以下のような相互関係を打ち出した。第一に、新宗教運動は常に出現しているが、それらは一般的に長続きしない。カリスマ的、予言者的、または天啓的な人物を囲んで出現しても、それらはしばしば 2、3 年の内に消えてしまう。そして第二に、持ちこたえた少数の新宗教は、完全に正当な宗教的伝統として見なされるようになる。例として、モルモン教、チャーチ・オブ・クライスト、クリスチャン・サイエンスやセブンスディ・アドベントリスト(安息日再臨派)について一考すれば、これらはすべて 19 世紀に出現した時には、甚だしく攻撃されはしたが、今では「正当な」宗教団体と考えられている。バハイはアメリカ以外で同じ現象を伴った例であり、仏教に根ざしている日本の創価学会もそうである。

宗教社会学者もまた、重要なことに注目している。北米での初期の新宗教運動と 20 世紀後期の新宗教運動の違いを観察して認識したのは、それらの社会的立場である。新宗教運動は大抵の場合、経済的に社会の底辺で、そして不自由な生活をしている部分から出現する。アメリカ都市部のスラム街(または、ラテン・アメリカのファベラス、アフリカの都市を取り囲む不法定着者街)を歩いたり、貧困状態にある田舎を訪れてみると、簡単にこの現象を目にするだろう。そこ

で、なじみの薄い宗教団体の伝統を発見することになる。しかしながら、このような社会的地位の中で、彼らはそれほど注意を引かないのである。20世紀後半の宗教運動の新しい要素は、それらが他の社会階級、つまり中流階級または中流の上の階級の若者を魅了したということであろう（参照：ブライアン ウィルソン著「The Social Impact of New Religious Movement」ニューヨーク 1981年）。中流、または上流階級の両親たちが、ハーバード大学を卒業した25歳の息子が今では韓国人の救世主を信仰している、またはトロント大学を卒業した24歳の娘が今では空港で「ハーレ・クリシュナ」を歌っているということを知った時の苦悩を想像することは容易であろう。しかし、成長した子供たちが新しい、または因習にとらわれない宗教伝統を受け入れる時に起こるそのような反応を私たちは歴史的に知っているのである。例えば、聖トーマスの両親は、彼がドミニコ会の修道士に、そして新宗教の聖職に就こうとした時に、彼を一年間監禁したという。1960年代および70年代の流行りの宗教に惹かれた若者たちは、貧しいわけでもなく、ぎりぎりの生活をしていただけでもなかった。彼らは中流階級および中流の上の階級出身だったのである。さらにこれらの動向は、メディア報道が示しているよりも、もっと小規模のものなのである。例えば、カナダにおける多くの新宗教団体のメンバー数は、これらに反対している人たちが何十万、何百万いると主張しているが、何百、何千にすぎない。もっと多くのメンバーを抱えるカナダの団体もあるにはある。

「新しい宗教」は、伝統的な学術的概念に挑戦するような現象を宗教学者たちに呈示したが、私の知る限り、「新しい宗教」において私たちが宗教的現象を扱っているのかどうかを疑う宗教学者はひとりもいなかった。「良い宗教」なのか「悪い宗教」なのかという問題はしばしば大衆論争の重点となっていたが、宗教学者たちは、自分たちがここで直面しているのは宗教的現象であることを決して疑うことはなかった（参照：J. ゴードン・メルトン著「Encyclopedic Handbook of Cults in America」ニューヨーク 1986年と、「New Religions」を含む「Encyclopedia of American Religions」デトロイト 1989年）。

IV.サイエントロジーは宗教なのか？

19世紀と20世紀に出現した宗教に対する現代学問的研究は、神学の古典的分野から区別されるべきである。神学の仕事は、ある特定の団体（キリスト教、ユダヤ教、イスラム教、ヒンズー教など）— 欧米ではほぼ一般的にキリスト教を意味する — の信仰を解説することだが、宗教の学問的研究はすべての宗教的現象の科学的な分析と解説に重点を置いている。したがって、現代の宗教研究分野における最初の課題のひとつは、宗教の定義をキリスト教との典型的な同一視から解放することであった。標準的な辞書での宗教の定義は、宗教全般を、特にキリスト教やその他の一神論的な信仰と同一視する傾向をいまだに反映している。これらの定義からしばしばわかることは、宗教の唯一の、または中心的な特徴は「至高の存在への信仰」であるということ

だろう。しかし、宗教学者たちは、そのような「至高の存在への信仰」を持たない、主要で古くからある宗教を知っている。主要な例としては、特にそのような信仰を明白に、そして断固として拒否しているテラバディン (Theravadin) の仏教、そして同じようにその信仰を明白に拒絶しているジャイナ教がある。しかし、これらの宗教は 2,000 年以上も前からのものである。さらに、儒教の伝統は、超越的存在に対する強調を最小限にし、正しい人間関係を最大限に強調している。そしてヒンズー主義では、たくさんの神や女神が存在するが、ただひとつの「至高の存在」は存在しないのである。さらに、西洋の一神論信仰の非常に神秘的な宗派は、神を「至高の存在」と見なすまさにその概念に対してしばしば批判的であり、神の実在性はそのような概念を超越すると主張する。このように、歴史を通じて人類の中で存在してきた広く多様な宗教的伝統に、適切な宗教の定義や理解が不可欠であろうと思われる。

それでもやはり、人類の宗教伝統の中には、世間のものを超越する特性があるという認識があった。しかしながら、その特性や実在は広く多様な方法で名づけられた。キリスト教徒は「神との統合」に努めただろう。イスラム教徒は「アラーへの服従」を求めただろう。一方、仏教徒は「内なる教化、または悟り」を達成することにもっと努力を傾け、ヒンズー教徒は「永遠のアートマンまたは自我」を知ることに導かれ、そしてジャイナ教徒は「良い精神」の教化に努めたのである。したがって、現代の宗教研究の中で浮かび上がってきた宗教の定義には、「至高の存在」の観念を持たない、または「究極 (The Ultimate)」といった名称の、そういった概念を明白に拒否する宗教を含めるために、十分に広い意味合いで理解される「超存在 (A Beyond)」の認識がいくらか含まれている。すべての宗教が生命の「神聖な」特性を確認しているが、すべてがみなその神聖さを「最高の存在」と同一視しているわけではない。

西洋のキリスト教プロテスタントは、**信仰**を、宗教の中心であると強調したかもしれないが、他の種類のキリスト教および非キリスト教は、**宗教的実践**に重点を置いた。例えば、仏教で重要となるのはその実践、苦しみを克服するための「道」、八正道の実践である。ヒンズー教では人生のすべてが実践 (rajyoga)、または仕事 (karmayoga) のひとつであるという「究極」への唯一の「道 (Way)」であるとわかるだろう。しかし、実践とはただ瞑想や黙想をしたり、行動したりするだけではない。それはまた祈りや倫理的行動や家族的関係、そして他の多岐にわたる実践である。程度の差こそあれ、あらゆる宗教的伝統では、宗教の概念に沿って生きていかなければならない。そして、宗教的実践によってのみ実証された人生、という人生がある。このように、その概念や与えられた宗教的方法の倫理的な指針を追求する実践は、宗教とは何かを理解するためのもうひとつの特性であるとして考えられた。さらに、私たちが宗教的団体や伝統で観察する実践は、しばしば儀式的な実践である。

したがって、現代の宗教研究は、もうひとつの宗教的生活の特性、つまり儀式的な特性を認めるようになった。儀式や行事は、人生における究極的な特性を信者に促すために宗教的団体が持

つ、構造化された行動様式である。中国のいくつかの宗派では、儀式とは宇宙の秩序を維持するのに必要不可欠なものと考えられており、数日にわたる手が込んだ行事だった。ある宗教伝統、例えばクエーカー教徒は、儀式の役割を抑えている。しかし彼らは、「沈黙の中での集まり」がその団体にとって必要不可欠だと考えていた。宗派によって儀式的特性は大きく異なるのだが — そしてギリシア正教の儀式の壮麗さや、メノナイト（アナバプティスト）の集会場の儀式的簡素さに見られるような特定の宗派内においてでさえ — それは人類の宗教的生活を表す特性である。

信仰、宗教的实践、儀式といったこれらの要素は目立って孤立しているわけではなく、特有な生き方や文化の方法を創造するために、宗教的団体の生活の中で統合される。そのようにヒンズー教徒たちは、彼らの生活の方法、つまり現世的な特性および超越的な特性の両方を持つ方法を促進するための、信仰や宗教的实践、儀式の複合体を共有している人たちである。宗教という言葉の語源であるラテン語の「religare」は「ひとつにすること」を意味する。そしてここで私たちは、その「ひとつにすること」のふたつの意味を知ることができるであろう。宗教を通して「人間と神聖」を「ひとつにすること」、そして宗教団体で人々を「ひとつにすること」である。

これらの考察からわかることは、現代の宗教研究の中に、この「道」を通じて人間を神聖/神に**関係づけることを求める信仰、宗教的实践、行動、そして儀式の複合体によってひとつに結ばれた男女の団体**としての宗教の理解が出現した、ということであろう。しかし、この宗教の定義の各特性（団体、信仰、実践、行動、儀式、道、そして神）は、(a) ある特定の宗教の伝統にある特有の言葉の中で、また (b) ある特定の伝統にあるすべての要素というよりも、限定的要素に対する強調として理解されなくてはならない。よって、例えば、宗教における「団体」の特性は、道教やユダヤ教よりもユダヤ正教でより強調されるであろう。同様に「神」は、ユダヤ教では超越した現実性（Transcendent Reality）として、ヒンズー教の多くの宗派では、未到達の内なる「自己」として理解されるかもしれない。しかし、そのような多様性は宗教の定義を無効にするものではない。それは単に、現代の学術的な宗教解説が網羅しなければならない宗教的現象の多様性を反映しているにすぎない。

このような視点で、サイエントロジーが宗教なのかどうか問うことにしたい。「サイエントロジーは宗教である」というのが大まかな回答である。このことは、上記のような宗教の理解によってサイエントロジーの立場を見てみるとはっきりするだろう。

サイエントロジー宗教では、私たちは人生の意味や最終目標に遭遇することができるのであろうか？ たとえサイエントロジーの団体とその著作物の最も大まかな知識でさえ、人を肯定的な答えに導くことができる。サイエントロジーの著作物によると、サイエントロジーは「精神、人生、そして魂の問題を解決する応用宗教哲学と技術」なのである。サイエントロジーによれば、これらの「精神、人生、そして思想の問題」は恒久的なものではなく、克服することができるという。

サイエントロジーでは、その「精神、人生、そして思想の問題」の克服は、認識と知識に集約されている。その認識と知識の中心は**セイタン**および**8つのダイナミックス**である。サイエントロジー信仰のいくつかの主要な側面を示すために、それぞれを簡潔かつ明確に説明する必要があるだろう。

サイエントロジーによると、私たち人類は、いろいろな部分から成り立っている。それは身体、心、そして**セイタン**である。サイエントロジーの「セイタン」は、キリスト教の「魂」や、ヒンズー教の「精神」に類似している。人間の問題のひとつは、人類が自分たちの本来の姿への認識を失ったことである。これは、サイエントロジーにおいてセイタンとしての自己の認識を意味する。しかし、セイタンとしての自己の認識や知識は、繁栄と生存にとって必要不可欠なのである。人類は、しばしば自分たちの真の実在性を身体や心と混同し、また自分たちを身体もしくは心だけだと思っている。しかしサイエントロジーにとって、人類は自分たちの本質、サイエントロジーの言葉では「その人はセイタンである」ということを再認識することが必要不可欠なのである。人はセイタンなので、「精神的で、永遠であり、実質上破壊できない」のである。

セイタンを身体や心、または「エングラム」と混同し、混乱することによって、セイタンとして自己を認識することが不明確になっているため、主要な宗教課題は人々の精神性の回復である。「セイタンはすべての創造の源であり、生命そのものである」ことから、この認識は、サイエントロジー用語でいう「クリアー」に導く宗教的手段の実践における第一段階なのである。サイエントロジーによると、人間がその本質および現実性の同心円（8つのダイナミックス）を認識していくに従い、人生にある8つのダイナミックスを自由に、そして創造的に進んでいくことができると、サイエントロジストは信じている。（参照：「サイエントロジーとは何ですか？」1992年版）

生命に関する基本メッセージは、サイエントロジーによると、8つのダイナミックスにわたる生存なのである。第1のダイナミックは、「自己」または個人として生きようとする生命の衝動である。第1のダイナミックは、8つのダイナミックスすなわち無限へと拡大する、より大きな存在の円の中にある。8つのダイナミックスの叙述は、サイエントロジーにとって根本的なことであり、それぞれの「ダイナミック」を簡潔に、概略的に述べるのが適切であろう。上述のように、第1のダイナミックは「自己」としての生存の衝動から始まり、第2のダイナミックに進む。それはサイエントロジーが「創造」または「未来のために創造すること」と呼んでおり、家族そして子供を育てることを含む。第3のダイナミックは「社会的な生存」である。これは任意の団体、友人、会社、国、そして人種に関係する人生の区画である。第4のダイナミックは「人類の種」つまり「人類または人類全般としての生存に対する衝動」である。第5のダイナミックは「生命形態」つまり「生存に対するすべての生命の種への衝動」である。第6のダイナミックは「物質宇宙」である。第7のダイナミックは「精神的衝動」つまり「生命自体の生存に対する衝動」である。第8のダイナミックは「無限としての存在に対する衝動」すなわち、他者の呼ぶところの「至高の存在、創造者」

である。「ダイナミックスの知識を持つと、人はより簡単にどのような生命の観点からでも探求して理解することができる」（参照：「サイエントロジーとは何ですか？」1992年版 149ページ）。宗教的な探求と課題が展開するものは、生命全体の範囲、それはサイエントロジーの言葉で8つのダイナミックスすべてなのである。

「他者が呼ぶ」ところの至高の存在、または創造者をサイエントロジーが肯定しているのは特に第8のダイナミックにおいてである。しかしサイエントロジーは、「すべての中のすべて」ということよりも「無限」という言葉の方を好む。「無限」との関係においてサイエントロジーが控え目になることは、その他の宗派に似ている。究極の神秘の前においては、すべての宗派の神秘論者は控え目であることを、時には沈黙を勧めるのである。

セイタンに関してサイエントロジーは、8つのダイナミックスや、物事の究極の精神的本質を信じており、その点では他の宗派に類似している。サイエントロジーの宗教的探求は、西洋の宗教的探求にある、聖なる者の意志に従うことを強調する傾向よりも、むしろ教化と悟りの東洋のプロセスに似ている。サイエントロジーについて、学者の中には、「技術化された仏教」という見解を持っていると主張する者もいるが（参照：J. フィッチャー編 F. フリン「Alternatives to American Mainline Churches」ニューヨーク 1983年）、一方では東洋の精神開発実践に似ていることを強調する者もいる。しかし、8つのダイナミックスを信仰の中で考えてみると、ついには究極の神秘、神と同一化する中世的な神に向かう魂の旅に類似していることがわかるだろう。

他のいくつかの宗教と同じように、サイエントロジーでは、主に人間の問題に問いかけるプロセスが、失ったまたは隠されている人間の精神的な力、または生命の特性を現実化してゆくプロセスであるという、宗教治療学的な点から宗教的探求を行っている仏教において、その問題やプロセスは、非教化から教化への昇華であり、キリスト教では、「罪深い」から「救われた」状態への昇華である。一方サイエントロジーでは、「プリ・クリアー」から「クリアー」、そしてそれ以上に昇華する。ここでいうクリアーの状態とは、過去の経験による苦悩から解放され、理性的で道徳的な人生を生きる能力を持つ自己の精神的本質と、実現化された精神的自由の認識である、と理解されている。サイエントロジーにおいてこれが意味するものは、宗教的探求の本質であり、宗教的努力の最終目標なのである。しかしながら、宗教的探求はクリアーの状態で終わることはなく、より高いレベルでの認識と上級レベル、すなわち「機能しているセイタン (operating thetan)」レベルでの能力へと続くのである。これらの上級レベルを達成することで、人は自己や環境をコントロールできるようになる。サイエントロジーの教典によると「生命、思考、物質、エネルギー、空間、そして時間をコントロールする」ことができる。

では、今まで概略して述べた信仰を宗教的实践と方法に結び付けてみたい。サイエントロジーのこの特性は、しばしば「技術」、つまり理論を応用する手段という彼ら自身の言葉で表現される。

サイエントロジーでの宗教的実践の中心となるのは、サイエントロジストが神聖な行事と見なしているオーディティングによる現象である。これは、セイトンとして必要不可欠な、自己の精神的本質を認識することから、また、適切にその本質を働かせることから人を妨げている、隠れた精神的障害を認識させるプロセスである。完全に機能することや、生命を具現化することを妨げているこれらのものは、「エングラム」と呼ばれる。「E メーター」として知られる宗教的技術機器は、オーディティングの際に、教会員またはサイエントロジーの信者が、クリアーまでの途上でこれらのネガティブな障害を認識して克服できるように彼らを援助するために使用される（参照：L. ロン ハバード著『ボランティア聖職者ハンドブック』ロサンゼルス 1976 年）。オーディティングのプロセスは、宗教専門家 — オーディター、サイエントロジー教会の聖職者やトレーニング中の聖職者 — とオーディティングを受けている人、プリ・クリアーとの間で展開する。決められた手順と質問に従うオーディティングのプロセスは、プリ・クリアーが自分自身について認識し、もっと効果的に生きる能力を発達させるように計画されている。サイエントロジストは、そのような実践によって、人は「精神的に盲目の状態から精神的存在のすばらしい喜び」へと昇華できるのだと信じている。

そのような実践は、同じように内面にある精神的本質に目覚めることを求めた、他の宗教の精神的教義に類似している。サイエントロジーが用いる E メーターの技術は独特ではあるが、その奥にある概念はそれほどでもない。それは、ある仏教伝統における曼荼羅^{まんだら}の役目や、その他の東洋の伝統で見られる外部からの援助を伴った瞑想に似ている。

さらに、サイエントロジストがまさに信じるものとは、L. ロン ハバードが現実の本質に対する洞察と、人間性の本質を回復させる実践的な技術を完成させたということである。ハバードの著作物は、サイエントロジーの団体内部においては権威的な文書である。これはヒンズー教のヴェーダや、仏教の経典などと同種のものである。とはいえ、L. ロン ハバードが考え出した宗教的手段は、実践の経験を通じて確認しやすいため、ハバードの洞察は単に信仰するものではないとサイエントロジストは主張している。またこれは、経験を優先する古い仏教の英知に呼応するものである。

サイエントロジストの実践は、この中心的役割を持つ宗教技術と方法を超えて広がっている。それは、人間がクリアーの状態とそれ以上に昇華するにつれて、すべての行動は自由に、活動的に、そして意義深くなるからである。最終目標までの途上でサイエントロジストは教材を読み、自分の信仰を試し、内なる生命を発達させ、結婚し、すべての行為や行動で信仰の概念を具現化しようと努めている。サイエントロジーの著作物の中には、サイエントロジストの人生を形成すべく「行動規範」や、他の倫理規範に対して数多くのことが言及されているのがわかるだろう。

宗教とは、ただ単に一連の信仰や儀式や実践だけではない。宗教は、そのような信仰、儀式、そして実践によってひとつになった人々の団体でもある。サイエントロジーにおいては、宗教的生活にこの特性を見出すことができる。世界の多くの場所で、サイエントロジストたちが宗教団体と

して定期的集まっているのを見かける。そこでは、サイエントロジーの教義を読み、ハバードの講演テープを聞くことで、個人の信仰を深め、他人に対してその信仰の知識を広げることが意図した行為を目にするだろう。その団体は、サイエントロジーの中に答えや根本的な生命の問題に問かける技術を見つけた人々から成り立っている（参照：アイリーン・バーカー著「New Religious Movements」 ロンドン 1989 年）。

結論：宗教の現代科学的定義の要素を考慮しつつサイエントロジーを再検討したところ、サイエントロジーが宗教であることは明らかである。目に見えない精神的な秩序、独自の際立った宗教的実践と儀式的な生活の特徴ある信仰と根拠がサイエントロジーにはある。そしてサイエントロジーは、独自の信ずるべき教材と団体独自の活動を行っている。

V. サイエントロジーは礼拝団体なのか？

ちょうど宗教の現代科学的定義が、西洋の一神論的な境界を超える宗教的行動、実践、そして信仰の型を含めるために、その定義の門を広げる必要性に気付いたように、「礼拝」の理解においても、現代の学術的定義は、西洋の流れを超えて東洋の伝統の宗教的、精神的生命の実践を含まなければならなかった。

歴史的に、そして地球規模で見ると、宗教学の学生は多種多様な「礼拝行為や活動」に遭遇している。土着の人々の宇宙的宗教伝統は、自分たちの礼拝活動を自然や創造者の宇宙のリズムに調和させた。彼らのすべての行為では、実質的に — 狩りから植樹、誕生から死においてまでも — 儀式や礼拝活動を優先した。西洋の歴史的、宗教的な伝統において、祈りと儀式は礼拝団体の中心的行為であった。ここでの礼拝とは、毎日 5 回の行為でアラーを思い出すことから、聖なる日に聖書でエホバを呼び戻すこと、またローマ・カトリック信仰の毎日のメッセで「キリストの肉体」を昇華させることにまで及ぶ。東洋の伝統における礼拝とは、ヒマラヤの僻地でヨガの黙想をする行為や、「具現化された魂」である神像の前でスカイをまとったジャイナ教徒たちが聖歌を繰り返すこと、また、すべての水の滴や木の葉に宿る「神」の存在の面前で行われる手の込んだ神道の儀式、神の創造者的概念を拒むチベット仏教徒による一週間の「歌と踊り」の儀式であるかもしれない。一般的に現代の宗教学の学生には、宗教とは、その宗派の人々を目に見えない神聖なもの (Sacred) によって助ける、または彼らを神聖なものに連結させる宗教的行為であると理解されるようになった。世界的にそして歴史的に見て、礼拝はさまざまな種類の行為や行動を伴うものである。

サイエントロジー教会では、教会員を神聖なる者によって救済し、また神聖なる者に結び付けるように計画された多種多様な礼拝活動や行為がある。それは(上述の) **オーディエティング**の活動と、

トレーニングの中で目にすることができる。オーディティングとは、人を「プリ・クリアー」から「クリアー」、またはそれ以上に昇華させる実践である。それは、宗教的人生の主題である、目に見えない特性である「セيطان」という不滅の精神的存在を、人が認識できるように助けるサイエントロジーの方法である。しかし、サイエントロジーにおいてそれと同じくらい重要なのがトレーニングである。オーディティングで人は自由になれる。そしてトレーニングを通じて、人は自由にいられることができ、人生の状態を向上させるという目的を達成できるようになる。

すでに指摘したように、ある特定の宗教的伝統の中での礼拝の形は、彼らの神聖な、もしくは「究極」を経験することと一致するのである。サイエントロジーにおいて、トレーニングとは、8つのダイナミクスを通じて第8のダイナミック、つまり無限へと人を昇華させる活動である。サイエントロジーのトレーニングは、不規則なものでもなければ、単なる「学習」でもない。むしろそれは本質的な知識と、その知識を日常生活に応用する能力を獲得するために、明確な手順 — 自分の速さで、そして「チェックシート」によって — を通じて昇華していくものである。サイエントロジーでは、「セيطانの究極的な能力についての知識」を含むものから始まり、さまざまなトレーニングのコースが提供されている。

さらに馴染み深い礼拝行為の形態は、サイエントロジストが儀式や行事のために集まる時に行われる団体儀式の中で見つけることができる。サイエントロジーの著作物には生命の循環の中の、誕生、命名、結婚そして死、という主要な出来事を記念する式典や儀式が含まれる。それらの式典や儀式は、そのような人生での出来事を、サイエントロジーの団体で見られる生命の神聖な深みに結び付けている（式典と儀式のいくつかについては、L. ロン ハバード著『サイエントロジー宗教』ロンドン 1974年を参照のこと）。サイエントロジーでの、この生命の循環における儀式に類似したものは、実質的にすべての宗教的伝統で見つけることができる。そのような儀式は、もし人の人生が、完全性や具現性を成し遂げるというのであれば、目には見えないが、認識して認める必要のある精神的特性に関連している、という概念を演じるのである。

礼拝行為は団体的であると同様に個人的なものにもなり得る。恐らくこのことは、祈りに関係づけると最も明らかになるだろう。だがそれは、瞑想という行為や精神的な鍛練に照らし合わせても真実なのである。スーフィーがひとり祈っていようと、集団での回転ダンスの祈りをしていようと、人は礼拝活動を行っているのである。仏教徒がひとりで山腹の奥深いところで瞑想していようと、集団でストラを歌っていようと、人は礼拝行為を経験しているのである。

サイエントロジーでは、個別の礼拝行為と団体的な礼拝行為の両方を行う。だがサイエントロジーでは、東洋の悟りの伝統のように個人的な努力が中心となる。悟りや完全なる精神的自由への昇華のプロセスは、サイエントロジー内でのオーディティングとトレーニングを必要とする。それに類似するものには、東洋の伝統での「グル（宗教的教師）と使徒」の関係がある。「グルと使徒」

での礼拝の中心的行為は、ヒンズー教におけるアートマン、それは至高の存在でもある魂の、悟りへの昇華を助ける内面的行為である。ヨガの姿勢や呼吸法、さらにイメージを心に映し出すようなある種の内面への行為は、ある種の外面的行為に結び付いているかもしれない。これらの内面的で精神的な昇華は短い、または、長い期間の後で展開することができる。そして、それらは信者たちの礼拝活動の一部なのである。多くの東洋の伝統において、トレーニングという禁欲的で瞑想的な行為や、精神的な成長のための個人的鍛錬は、何ヶ月も何年も掛けて、または必要不可欠な孤独の状態ですったん神からの指示を受け、初めて展開するのである。その宗教的実践はひとりで行われるが、それでもなお共通の信念や信仰、そして共通の行為を通じて、団体の活動と結び付いている。これはサイエントロジーにおいて、宗教的カウンセラーとその手ほどきを受ける個人との関係がとて重要であるとされるオーディティングとトレーニングを、適切にこれは説明している。そしてこれに類似するのものには、キリスト教の禁欲的な伝統における精神的指導者や、プロテスタントの伝統での牧師、ヒンズー教の伝統でのグルであり、そしてチベット仏教の伝統におけるラマがある。

サイエントロジーでは、人間の精神的本質の展開を助けるオーディティングやトレーニングに関連する、これらの内面的そして精神的行為は、宗教的知識や教育における発達にも結び付いているのである。サイエントロジーを説明する際、このことが意味するものは、主にダイアネティックスやサイエントロジーについて、L. ロン ハバードの著書と講演テープを研究することである（それは彼が構築したコースや、彼が書き上げそして監督した映画も含まれている）。そして、再びこの精神的実践や教典の学習を連結させたものは、伝統を交差して見受けられる。伝統的なヒンズー教のヨガでは、禁欲生活を実践すると同時にヴェーダを読む。信心深いイスラム教徒は、コーランを読みラマダーンを体験する。これらの活動は、精神性への道筋上でそれぞれを補強し合っているように思われる。

結論：サイエントロジーの宗教的実践と活動に関する再検討における私の結論は、サイエントロジーが現代宗教学で理解されているところの礼拝を、本当に彼らの礼拝の場所で実践している。サイエントロジーの礼拝の場所における活動は、人類の宗教的活動の中で見つけることができる、さまざまな形や実践の流れに沿っている。

M. ダロル・ブライアント
1994年9月26日

